
魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

なのは四期アニメ化希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

【Nコード】

N3793Z

【作者名】

なのは四期アニメ化希望

【あらすじ】

『流星の射手と鋼の走者、若き槍騎士と竜騎の召士、四つの希望が集う時、二つの血を持つ古の若き王が目覚ます…』
転生者でない聖王と霸王の子供がStrikersの時代に送られる話。

これは『黒い月の聖王』のリメイクです。

プロローグ（前書き）

新たに書き始めました。よろしくお願いします。

プロローグ

時は古代ベルカ諸王時代

シュトウラにある城の一室で、2人の若い男女が産まれたばかりの赤ん坊を見つめていた。

「私達の子供…」

「綺麗な金色の髪に『鎧』…君の血を濃く継いでるようだね。」

碧銀色の髪を持つ男…クラウスが、赤ん坊の頬を撫でている金髪の女…オリヴィエに話しかける。

「でも目は貴方と同じよ？」

「うん。紫と青の虹彩異色…シュトウラの目だね。」

「名前は何にしましょう…」

「そうだね…シルバなんてどうだい？」

クラウスは少し悩んでから答える。

「シルバ…『森』って意味ね。」

「うん。僕達の目指す平和で緑溢れる世界…その象徴。」

「そうね…うん！貴方は今からシルバ！シルバ・ゼーゲブレヒトよ！」

そう言つてオリヴィエはシルバを抱き上げる。

「きゃっきゃっ！」

「ふふふ、シルバも喜んでるわ。」

「…この子には平和に過ごして欲しいけど…」

「無理でしょうね…でも、せめて十歳になるまでは何処かに…」

さつきまでの明るい雰囲気が消え、重々しい空気が漂う。

「…シュトウラの辺境の森の中に、ある人が治めている小さい村がある。そこで暫く育てよう。」

「なら私の顔見知りも居た方がいいわね。友人にそこで教育係と護衛を引き受けて貰うように頼んでみるわ。彼女なら安心して任せられるし。」

オリヴィエは頷きながら言う。

「もつとも、この子自身も強くなって貰わなきゃいけないし…よし！この子に僕の霸王流を教えることにするよ。」

「なら、私は『鎧』制御方法を教えるわ。」

「よし。じゃあ今後の方向も決まった事だし村の方に連絡を取ってくるよ。」

そう言っただけでクラウスは走るように部屋を後にした。

部屋に残ったオリヴィエは、シルバを優しくなでながら我が子の未来について考えるのだった。

「母上！父上！」

頭に子猫を乗せた金髪の少年が部屋の中に走り込んでくる。

「久しぶりだね。」

「元気だった？怪我はしてない？」

「むしろ元気が有り余ってるぐらいだよ。」

《GAU!》

頭の上の子猫…レグルスが同意するように吼える。

「それと昔みたいに、私の事はママ、クラウスの事はパパって呼んでほしいな。」

「アリスが母上と父上って呼びなさいって。」

「ちよっシルバ様！何言ってるの？ふん。どう言うことアリス？！？」

アリスのシルバの発言に対し抗議しようとするが、虹色のオーラを纏った修羅の気配に最後まで言葉が続かなかった。

「いえ、あのですね…王家の者としての威厳とかを考えまして…その方がいいと思ったんです。はい。」

「ちよっと、OHANASIしよっか。」

「今なんか発音がおかしかったような…って襟首引つ張らないで下さい！シルバ様も笑ってないで助けて下さいよ！」

アリスはそのままオリヴィエに連れて行かれ見えなくなった。

「そう言えば…父上、突然二人で来るなんてどうかしたの？」

シルバは笑いすぎて腹を押さえながら気になっていたことを聞く。

「ああ、これからのことで重要な話があるんだけど…オリヴィエが戻って来たら話すよ。」

「じゃあ、それまで久しぶりに稽古付けてよ！」

「うん。じゃあ広場に行こうか。」

「こつちはもう準備できたよ。何時でもどうぞ。」

「では、武装形態！」

光が収まりと、大人になったシルバがその場に立っていた。

「行くぜ！！」

そう言うシルバは一瞬で距離を詰め左腕を下からクラウドスに向け振り上げる。

それをクラウドスは右手を添えるように受け止める。

それを予想していたシルバはそのまま左拳に体重を乗せるように力を入れて無理矢理振り抜く。

クラウドスは足に力を入れその場に踏みとどまり左拳をシルバの原に向け突き出す。

「霸王断空拳！！」

シルバはそれを腹に力を入れわざと食らい、その力を利用して上に跳び、クラウドスの背中に降り立ちそのまま振り向きざまに右手で裏拳を打ち出す。

クラウドスはしゃがみながら振り返り裏拳をかわし攻撃に移る。

猛攻を受け後ろに下がり距離を開けたシルバに対し、クラウドスは声

をかける。

「今のは良かったよ、シルバ！」

「そう言いながら、かなり余裕そうだけど……!!」

シルバは返事をしながら再び近づく。

クラウスがそれに対してカウンターを入れようとした瞬間、シルバは特殊なステップを踏み再び後ろを取り、右拳を打ち出す。

「!?」

「霸王断空拳!!」

今度はシルバが断空拳を放つ。

その拳はそのままクラウスに直撃する。

決まった！とシルバが思った瞬間クラウスの拳がシルバの肩に突き刺さり、シルバは回転しながら吹き飛んだ。

「うん。いつもよりかなり早く一本取れたね。」

「一本取れたのは嬉しいけど……かなり痛い。」

「技が決まったからって、すぐ気を抜くからだよ。これからは決まった後も気を抜いちゃ駄目だよ。」

「はい。」

いつの間にか試合を見ていたオリヴィエとアリスが近づいてくる。

「かなり強くなったみたいね。」

「そう言いながらシルバを抱きしめるが……」

「痛い！母上肩が！」

その行為がシルバの怪我を悪化させてしまう事になった。

シルバ達はイスに座ってオリヴィエ達が訪れた理由を聞いていた。

「では、やはりここに来たのは戦争の激化が理由ですか？」

「ええ。シルバには戦争の恐ろしさを知って欲しくて、何度か私の騎士として戦場に立って貰ってたでしょ？」

「…うん…」

オリヴィエの言葉にシルバは辛そうな顔をしながら返事をする。

「これからの戦争はもっと激しくなる…だから逃げて欲しいの。」

「…別の世界ですか？」

「いいえ。」

「…別の『時代』よ。」

プロローグ（後書き）

シルバ『俺は不死身だ、この世に自分の存在を刻み付けるその日まで、永遠に！』

シルバ「この場はしばらく、『黒い月』からの変更点を書くことになってます。」

キャラ「今回ののは、目の色・戦争への参加…ですね。」

眠り（前書き）

初の予約投稿です。

眠り

「別の時代…ですか？」

「ああ、別の時代だ。」

シルバの呟きにクラウスが答える。

「ちよつと待つて下さい陛下！そんな事の出来る魔法聞いたこと有りません！どうやって…」

「もうちよつと静かに話して。」

悲鳴に近い声で話すアリスをオリヴィエが遮る。

「あ、はい……つて、これが叫ばすにいられますか！どうやって送るんですか！？」

「それは俺も気になる。説明してくれ。」

「分かったわ。」

そう言つてオリヴィエは説明を始める。

「先日、ローラン兄様がシルバの為に『コールドスリープ』と呼ばれる魔法を発動させる道具を用意してくれたの。」

「…コールド、スリープ？」

「ええ、体温を下げ、体の成長を止めてに眠らせる魔法。」

「まあ、分かりやすく言えば『冬眠』…かな。」

オリヴィエの言葉をクラウスが補足する。

「私たちはね、シルバに生きて欲しいの。」

いろんな所に行つて、いろんな物を見て、いろんな事をして、自由に生きて欲しい。

でもどうせなら、この時代の誰も知らない世界、未来の世界に生きて欲しい。

これは私達からのお願い。私達がシルバにして欲しいことなの。」

オリヴィエ達はシルバの瞳を見つめながら話す。

「お前は強くなった。もう自分を守ることが出来るほど。」

「俺はまだ父上にも母上にも一回も勝つてない！…！」

「当たり前だよ、そんなに僕は弱くない。その僕から一本取ったんだ。誇って良い。頼む…分かってくれシルバ。」

「そんなの二人の我が侭だ！俺はみんなで居られればいい！」

「…正直ね、この戦争で私達が死んでしまうかもしれないの。我が侭でも良い。言うことを聞いて。このとおりよ。」

おもむろに立ち上がると二人はシルバに頭を下げた。

「…頭を上げて。そこまでされたら…もう断れないよ…」

シルバは泣きながら言う。

「ありがとう、シルバ。」

「でもこれだけは…聞いて欲しい。」

「何んだい？」

「一週間だけ一緒にいて…お願い。」

それを聞いたオリヴィエはシルバを抱き寄せて言った。

「もちろん、私達もそのつもりよ。」

一週間後、村の人達に挨拶を終え四人は聖王家の隠れ家に居た。

「これが…」

「まるで棺ですね…」

シルバとアリスが呟く。

「この中に入ったら私達が魔法を発動させるわ。」

「…うん。」

「ふう…間に合ったみたいだな。」

突然ドアが開き金髪の男性が入ってくる。

「兄上！？」

オリヴィエが驚きの声を上げる。

「どうして…」

「僕が教えたんだ。」

「クラウドス…」

オリヴィエがクラウドスを睨みつける。

「止めなさいオリヴィエ。私が頼んだんだよ。可愛い甥の見送りをさせてくれてね。」

「ローラン伯父様…」

「すまないなシルバ。父上や兄上達がお前に冷たく当たって…」

「そんな…」

「シルバ、お前の無事を願っているよ。」

「ありがとうございます。」

そう言っているとシルバはアリスの方を向く。

「今までありがとう。」

「シルバ様…どうかお元気で。」

そして最後にオリヴィエ達に向き合う。

「シルバ…元気に育ってくれよ。」

「体調には気を付けてね。」

「はい…父上、母上。」

全員との挨拶が終わり、シルバは装置の中に入ったのを確認するとオリヴィエ達は魔法を起動させた。

「どうか…この子が目覚めた時代が平和でありますように。」

オリヴィエの呟きは空に消えていった。

眠り（後書き）

シルバ『異物の混じった空間。ここはテメエの知る場所じゃねえんだよ。』

シルバ「今回の相違点！」

キャラ「シルバ君の伯父・コールドスリープ……ですね。」

シルバ「ちなみにローラン伯父様の説明は後々あります。」

目覚め（前書き）

かなり短いです。すいませんoysz

目覚め

side カリム

数年前から私の元に二つの予言が現れていた。

片方は、管理世界の崩壊ともとれる予言。

そしてもう一つは、私達グラシア家…いや、聖王教会の待ち望んだ物だった。

その予言が出てから、私とシャツハは毎日の様に教会本部の最深部にある『聖王の間』を訪れている。

「騎士カリム、そろそろ時間です。」

「そう…」

私が肩を落として部屋を出ていこうとしたその時、部屋に安置されていた棺が光り出す。

「これは…!？」

「まさか…」

光が収まり金髪の少年が出てくる。

「…ここは…」

「お待ちしておりました…『聖王』シルバ・ゼーゲブレヒト陛下。」

私は頭を下げながら話しかけた。

side out

「そうか…母上は『ゆりかご』で…」

「はい…クラウド陛下はオリヴィエ陛下以外の方とご結婚なさり、子孫もいらっしゃいます。」

「…父上の子孫か…」

そう言いながらシルバは少し寂しそうな顔をしながら窓の外を眺め

る。

「…空が青い…木も生い茂っている…」

「はい。今は既にベルカの王家はございません。したがって、国同士の戦争も存在しません。」

「…戦争の無い世界…か。」

その後も暫くシルバはこの時代について質問をしていった。

「現在、私は六課と言う部隊に、ロストロギアと呼ばれている聖王家の聖遺物を回収して貰っています。」

「ロストロギア？」

「はい。崩壊した世界や文明の持っていた力の塊を示す言葉です。」

「で？さっき聖王家の聖遺物って言っていたが、何を回収しているんだ？」

「『レリック』です。私がそれを六課に回収するよう依頼したのに理由はあります。」

そう言つとカリムは何かを撫でるように右手を振る。すると幾つものウィンドウが空中に現れる。

「数年前から、何者かがレリックを回収しているのです。」

「なに…？」

カリムの言葉にシルバは飲もうとしていた紅茶を降ろす。

「さらにレリックが発見された場所などで高エネルギー研究施設の跡などがあり……」

「ガシャン」

カリムとシャツハは音のした方を振り返と、シルバが持っていたコップを握りつぶしていた。

「…何処の誰だか知らんが…いい度胸だ…よし、俺をその六課とやらに入れる。」

「はい？」

二人はシルバの言葉に思わず間抜けな声を出す。

「だから俺を六課に加える。レリックを利用してる奴は俺がを叩き潰す！」

「しつ、しかし危険すぎます！」

「…カリム、レリックの正体って知っているか？」

「いえ…そこまでは…」

「なら教えてやるよ。聖王ってのはな自らの『鎧』の出力を上げるためにとある力の結晶であるレリックを取り込むんだ。レリックを取り込んだものが死ぬと、取り込まれた力と取り込んだ者の力…二つの力の結晶が生まれる、それがレリックだ。」

「そっ…それではレリックというのは…」

「歴代聖王の遺体だ。」

それを聞いたカリムは少し考え込む。

「…分かりました。明日六課の責任者に相談してみます。」

「ああ、頼む。」

「それとシルバ様にお返しするものがあります。付いてきて下さい。」

「そう言つとカリムは立ち上がり歩き出した。」

シルバ達は第8資料保管庫と書かれた扉の前に着いた。

「少しお待ち下さい。」

カリムはそう言つと扉の横にある機械にカードを通した。

「ガチャン」

鍵が外れ扉が開く。

中には直径1メートルほどの巨大な水晶が置いてあった。

シルバは水晶に手を当てある名前を呼ぶ。

「おいで！レグルス！」

《GAOOOOOOO！！》

シルバが名前を呼んだ瞬間、激しい光と巨大な雄叫びがあがる。

「きゃあ！？」

少しし光が止むとそこには綺麗な鬣を生やした巨大な白い獅子がいた。

《GAOOOOOOO！！》

獅子はシルバの前に行き頭を下げてから再び遠吠えを上げる。

まるで主を帰還を祝福するかのように…

目覚め（後書き）

スカリエッティ『廻る廻る宙の中心…』

シルバ「相違点！」

キャロ「私と会ってません・八神部隊長の代わりにシャツハさんが話し合いに出ている。」

シルバ「ちなみに俺が眠っていた部屋…『聖王の間』は幹部以上の
人以外は入れないらしい。」

機動六課へ（前書き）

今回も短いです。

機動六課へ

「聖王教会からの派遣？」

「ええ、少し事情があるの…良いかしら？」

「そら構わへけんけど…どんな子や？」

「は yet はカリムに訪ねる。」

「『レリック』の本来の持ち主。訳があつて、今は私の義理の弟よ。」

「

「…ちょいまちい。レリックの持ち主言つたか？」

「ええ。」

「あれはロストロギアやる？持ち主なんかおるんか？そんなら本局で保護した方が…」

「事情があるのよ。」

「……」

「カリムは事情の部分を強調して言う。」

「別に意地悪で隠してる訳じゃないわ。」

「…分かつとる。はあ…カリムには世話になつとるし…ええよ。でもいつか必ず話して貰うで。」

「分かつてるわ。」

「カリムはモニターでシャツハを呼び出す。」

「シャツハ、彼を連れてきて。」

「【かしこまりました、騎士カリム。】」

「モニターが閉じて暫くし、扉が開かれる。」

「紹介するわ、レリックの正統な所有者…シルバ・S・グラシアよ。」

「

「よろしく。」

「此方こそ。」

「シルバに返事をする。」

「書類なんかの手続きが有るから、六課への派遣は一週間後になる」

と思うわ。」

「了解や。こつちも準備しとく。」

「彼女が今の『夜天の王』か…」

「『夜天の書』を御存知なんですか？」

はやてが去った部屋でシルバ達三人が話していた。

「ああ、あらゆる魔導を記録し使う王と一騎当千の四人の守護騎士…だったかな？どの国も仲間に引き入れよう必死だったからな。」

「そんなに有名だったんですか？」

「ああ、何でも力ずくで仲間にしようとしたガレアの死体兵1000体を、守護騎士の一人が壊滅させたとか。名前は確か…『烈火の将』だったかな？」

「烈火の将…騎士シグナムの事ですな。」

シャツハが空になったカップに紅茶のお代わりを注ぎながら言う。

「彼女はバトルマニア…決闘好きなので、一度手合わせをしてみたいかがですか？」

「そうだな…一騎当千の古強者か…俺の霸王流はどこまで通用するか試してみたいな。」

そう言いながらシルバは紅茶を飲み干す。

「では、これからの予定をお話します。」

話が一段落付いたのを見てカリムが口を開く。

「陛下には一週間で、この時代の基本的な知識や資格を取得していただきます。言語に関しては昨日渡したデバイス…指輪が翻訳してくれます。」

「この指輪がねえ…」

そう言いながら右手の中指にはめた指輪を見る。

「それと古い文献により、レグルスもアニマル型ユニゾンデバイス

と呼ばれる物だということが分かりました。」

「ユニゾンデバイス？」

「はい。使用者とユニゾンして技の威力などを強化するデバイスです。」

「ふーん…それで？文献には他に何て書いてあったんだ？」

「レグルスの詳細が少し。」

「話してくれ。」

シルバはカリムに催促する。

「はい。歴代の聖王正当後継者が従えるアニマル型ユニゾンデバイスで、歴代聖王の知識や記憶などを保管する一種の図書館の様なものであると同時に、ユニゾン時に身体能力を上げ、魔力の炎熱変換を可能にするもの…と。あとは、とある兵器に対する絶対的な抑止力とも書いてありました。」

「なるほどな…」

シルバはそう呟くとレグルスに目を向けた。

一週間後、シルバとカリム、はやては聖王教会の執務室にいた。

「では、聖王教会教会騎士団騎士シルバ・S・グラシアを機動六課に正式にいたします。」

カリムがシルバとはやてを見ながら言う

「シルバ・S・グラシア、了解した。」

シルバはそれを了承し…

「機動六課、了解いたしました。」

はやても書類を受理した。

side シルバ

聖王教会からの引継作業後、俺ははやてに連れられて機動六課に来た。

「と言うわけで、この子が聖王教会から派遣されたシルバ君や！」
現在は、六課のみなさんと顔合わせ中。

「えゝ、聖王教会の騎士シルバ・S・グラシア、頭の上に乗ってるのはレグルスだ。よろしく！」

「よろしく〜!!」

六課のみんなが返事してくれた。

「ああ、そうや！エリオにキャラ、ちよつと来て」

「はっはい！」

はやてに呼ばれ、俺と同じ年ぐらいの子供が2人走ってきた。

「シルバは2人と同じ年ぐらいやろ？仲良くしてあげてな。」

「はい！僕はエリオ・モンディアル三等陸士です！」

「えつと…キャラ、キャラ・ル・ルシエ三等陸士です。キャラって呼んでください。」

「…」

うわ…顔真っ赤だ…

「…エリオもキャラも敬語じゃなくて良いよ。」

「うん。」

「はい…」

うゝん…気まずい…

「そうだ！騎士シグナムって誰だか分かるか？」

ふとシャッハとの会話を思い出し訊く。

「シグナム副隊長？うん、分かるよ。」

「教えてくれ。」

「ちよつと待ってて…シグナム副隊長!!」

「何だ？」

エリオがピンクの髪をポニーテールとやらしにしている女性を呼ぶ。

「アンタが騎士シグナムか？」

「そうだが…お前は確かシルバ・S・グラシアだったな。」

自然体だが隙がない…

「シャツハから聞いた通り、隙が一切無いな。」

「そう言うお前も隙がないな。その歳でこれほどとは…恐れ入る。」

「お褒めに与り光栄だ。」

「実に戦いがいがあるそうだ…どうだ？模擬戦でもしないか？」

「いいだろう。望むところだ。」

さて…俺の『拳』はどこまで届くかな…

side out

機動六課へ（後書き）

シルバ『理想を抱いて溺死しろ!!』

キャラ『黒い月』との相違点!』

シルバ「はやてにカリムの義理の弟で説明・はやてが俺の正体を知らない・『夜天の書』の話が出てくる。」

キャラ「ちなみにシルバ君とイクスヴェリアちゃんは面識ありません。」

シルバ「…イクスヴェリアって誰?」

キャラ「分かんない。今、作者からのカンペが出たの…」

拳と剣（前書き）

出来れば年内に『黒い月』の所まで追いつきたいです。

拳と剣

シルバとシグナムは模擬戦をする場所について話し合っていた。

「何処でやるんだ？」

「訓練所だ。着いてこい。」

そう言って二人は歩き出す。

「シルバ君がどんな感じで戦うのか気になるし、私達も行こうか。」

なのはの提案によって全員で模擬戦を見ることになった。

訓練所に出来上がった、廃墟の中でシルバとシグナムが対峙する。

「レヴァンティン、セツトアップ！」

set up

一瞬、光がシグナムを包み中から剣を持ち、騎士甲冑に身を包んだ姿で出てきた。

「さて、取り敢えず名を名乗ろう。私は『剣の騎士』シグナム。そして『炎の魔剣』レヴァンティン。」

「じゃあ、此方も改めて名乗ろう。『拳の騎士』シルバ。こいつは『小さき王』レグルス。武装形態!」

名乗り終わると同時にシルバは武装形態により大人の姿になる。

「ほお、特殊な強化魔法か……面白い！」

「来いレグルス！ユニゾン…イン！」

《G O O O O O ! ! 》

「なに！？そいつはユニゾンデバイスだったのか！？」

相手……シグナムは驚愕の声を上げる。

「準備は出来たぞ。」

「あの子猫、使い魔…守護獣じゃ無かったの!？」

フェイトが驚きの声を上げる。

「あれはアニマル型ユニゾンデバイスっちゅうやつらしいで。」

はやてが説明する。

「でも動物型のユニゾンデバイスなんて聞いたこと無いよ?」

なのはが質問する。

「まあ、うちもカリムから聞いたのが初めてやしな。」

「動物型のデバイス…解析してみたい!」

メカニックのシャーリーが興奮気味に言う。

「止めといた方がいいで…無闇に触ろうとすると噛まれるらしいで。」

「はやてが言う。」

「大丈夫ですよ!だって子猫じゃないですが。」

「…あれは魔力の消費を押さえるためなんやと。実際は大きくて白いライオンらしいで…」

「またまたそんな冗談を」模擬戦終わったら頼んでみよつと。」

はやての言葉を冗談と受け取ったシャーリーはどうやって解析させて貰おうかを考え始めた。

シルバの準備が終わると二人は同時に前に出た。

接近と同時にシグナムが剣を振り、シルバはそれを左手の甲で上に受け流すと同時に腹に向け右拳を放つ。

「あまい!」

しかしそれを予想していたシグナムに簡単に避けられてしまう。
そのまま受け流された剣を上から振り下ろす。

今度は受け流さず、右足を軸にからだを回転させ、わき腹に向け左蹴りを放つ。

「吹き飛ばし！」

「グッ」

蹴りをわき腹にモロに受け、シグナムが吹き飛ばす。

「やはり強いな…今は効いたぞ。」

シグナムは嬉しそうに言う。

「ならもうちょっと苦しそうにして欲しいな。」

そう文句を言うシルバにも笑みが浮かんでいる。

「久々の決闘で調子が漸く出てきたのでな…」

「段々ユニゾンに慣れて来た事だし…」

「これからが本番だ！」「」

再びお互いに接近し高速で打ち合う。

拳を剣の腹で。打ち下ろしを腕で。蹴りを鞘で。横風を掌で。

弾く。逸らす。防ぐ。受ける。

しばらく激しい攻防を繰り返して、埒が明かないと悟り、同時にお互い一歩下がる。

シルバは拳を、シグナムは剣を、突き出す。

「紫電一閃！！」

シグナムはカートリッジを使い、魔力変換の炎を纏わせ威力を高めた剣撃を。

「式式 紅蓮拳！！」

シルバはレグルスの力を使い、魔力変換で炎を作り出力を上げた拳撃を。

「ウオオオオッ！！」「」

それぞれ渾身の力で打ち出す。

しばらく力は均衡したが、お互いの炎が混ざり合い爆発を起こす。
その爆風を利用してシグナムが後ろに下がる。

「貳式 獅子紅爆炎拳！！」

それを追撃するように、シルバは全魔力で作った獅子の頭の形をした炎を拳に纏わせ放つ。

《シュランゲフォルム！》

「飛竜一閃！！」

それに合わせシグナムは蛇腹形態になったレヴァンティンを放った。二つの技がぶつかり合い、先程とは比にならないほどの大爆発が起き、煙が立ちこめる。

しばらくし煙が晴れると気絶した『拳』とボロボロに成りながらも立っている『剣』がそこにいた。

拳と剣（後書き）

オリヴィエ『……ついて来れるか。』

キャロ「相違点！」

シルバ「今回は無し！」

キャロ「嘘だよ！？小さいのが有るよ！！！」

シルバ「えゝめんどい……俺の二つ名が『黒い月の騎士』から『拳の騎士』に変更・はやてがレグルスの変身？を見ていないので『らしい』程度しか分からない。」

六課の初日（前書き）

今回は少しSEKKYOっぽいです。

六課の初日

side シルバ

ゆつくりと意識が浮上していく。

疲れ切り重い目蓋を開けると天井が見えた。

「おっ、目覚めたんか？」

「はやて、か…」

「能力リミッターで全力を出せないとは言え、あのシグナムにあそこまで傷を付けるとは思わへんかったわ。」

あれで全力じゃないのか…

「流石は一騎当千の古強者…」

「さて、もう動けそうやし行くで。」

「…行く？」

「みんなの所や！」

side out

はやてに連れられてシルバはちょっとした休憩室にやってきた。

「ライトニングの自己紹介は終わつとるから、スターズの二人からやな。」

はやての言葉にスバルが前に出る。

「はい。私はスバル・ナカジマ！階級はシルバ・S・グラシア二等陸士！よろしくね、シルバ！」

「スバルね…よろしく。」

（この感じは何処かで…うゝん…）

シルバが頭の隅で考え事をしていると、ティアナが話しかける。

「私はティアナ・ランスター。階級はスバルと同じ二等陸士。よろ

しく。」

「ティアナね。よろしく。」

「次は私達隊長陣かな？私はライトニング分隊隊長のフェイト・Ｔ・ハラオウンだよ。よろしくね？」

「私はスターズ分隊の隊長、高町なのは。みんなの訓練の先生でもあるの。」

フェイトに続きなのはも自己紹介をする。

「フェイトになのは…ね。よろしく。」

「あたしはスターズの副隊長のヴィータだ。二つ名は『鉄槌の騎士』。よろしく。」

「よろしく、ヴィータ。」（守護騎士の一人『紅の鉄騎』か…）

「私は医務官のシャマルよ。これでも騎士で二つ名は『湖の騎士』。よろしくね。」

「よろしく。」（後方支援の守護騎士…『風の癒し手』だな…）

「次は私です…部隊長補佐のラインフォース？空曹長なのです！」
（ツヴァイ？）

シルバは引っかけかきを感じ、デバイスを使って意味を調べる。

「…二番目？」

「はいです…二代目祝福の風、ラインフォースなのです…」

（…ああ、カリムが言ってた『管理人格』の名前を貰った子が…）
「よろしく、ラインフォース。」

「む…ラインで良いです！」

ラインが頬を膨らませて言う。

「…よろしく、ライン。」

「はいです…」

最後に、はやてが口を開く。

「シルバのコールサインやけど、セイクリッド01や。」

全員の自己紹介が終わり、シルバは一人で六課の隊舎内を散策していた。

「シルバ君！」

「キャラ？どうしたの？」

「シルバ君に少し聞きたい事があって…」

「聞きたい事？何？」

「えっと…ここではちよっと…」

話辛そうにキャラが言う。

「うん…じゃあ、俺の部屋で良い？」

「…うん。」

シルバはキャラを連れて自分にあてがわれた部屋に行く。

「ここだよ。」

「お邪魔します〜」

「どうぞ。」

「…シルバ君って一人部屋なの？」

部屋を見渡しながらキャラが聞く。

「ああ…で？聞きたい事って？」

「…シルバ君は…自分の力が怖いって思ったこと…有る？」

「…自分の力が怖いね…」

シルバは少し考え込む。

「うん…もしも自分の力で大切な人を傷つけたら…とかって…」

「…怖いさ。仲間を傷つけたら…って考えるとね。」

「じゃ、じゃあ「でも！」っ！？」

シルバはキャラの言葉を遮って言う。

「俺は力が無くて仲間を守れない方が怖い。」

「…仲間を守れない…」

「ああ、何のために力を使うのか…それが大事なんだと思う。」

「何のために使うか…」

「そう。キャラはどう思う？仲間を傷付けなければ良い？仲間を守

りたい？それとも二度と使いたくない？」

「私は…」

「別に今すぐ結論を出さなきゃいけない訳じゃないさ。」

「…うん…」

キャラは俯きながら返事をする。

「…キャラ・ル・ルシエ、その悩みが君の弱さであり、強さなんだよ。…もうこんな時間か…」

いつの間にか窓から見える景色は真っ暗だった。

「おやすみ、キャラ。」

「…うん…おやすみ、シルバ君。」

キャラが帰った後、シルバは布団に入り、ふと思った。

「…レグルスどこ行っただろ…」

シルバは念のためドアを少し開けて眠りについた。

おまけ

「あれどこ行っちゃったのかな？」

「…何してるんですか？シャーリーさん。」

「ティアナにスバル！良いところに！今ね、シルバ君の子猫を探してるんだけど知らない？」

「レグルスなら休憩室の椅子で寝てましたよ。」

「ありがとう！ティアナ。」

「何だっただん？」

「さあ？それよりティアンおなか空いちゃったよ」

「はいはい。」

「やっと見つけた！」

《ZZZZ》

「寝てますね〜チャンスです!」

《!!--!》

「よし、捕まえた!」

《GAOOOOOO!!--!》

「えっ…ぎゃ〜!?!」

次の日、無数の歯形があるメカニックが休憩室で見つかったとか…

「……何でお前ライオンモードなの?」

《GAO!!--!》

六課の初日（後書き）

シルバ「誰エ敵に回したか分かってンのかオマエ。」

シルバ「相違点！」

キャロ「シルバ君が負けに納得してる・自己紹介時の反応・私とのお話。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3793z/>

魔法少女リリカルなのはStrikers 二つの血を持つ聖王

2011年12月17日12時58分発行